

## アジア太平洋脊椎外科学会多施設共同研究ご協力をお願い

### 研究課題名 1：

「Distal Radius and Ulna (DRU) 分類を用いた骨成熟度評価による成長予測の妥当性の検討」

### 研究課題名 2：

「骨成熟度評価法の違いによる特発性側弯症に対する装具治療の効果の比較」

### 研究の目的及び意義

身長発育速度のピーク(PHV)が、思春期特発性側弯症(AIS)における側弯進行の予測因子として有用な指標となることが報告されております。しかし、個々の患者さんごとに PHV の時期が異なるため、PHV の時期の予測のため様々な骨成熟度評価法が用いられています。最も頻用される Risser sign は、骨盤単純 X 線での骨端線評価になりますが、これを用いた場合は PHV の時期を越えてからの変化をとらえるといった問題が指摘されています。そのため 2014 年に香港大学の Luk 先生らにより新たな骨成熟度評価法である手の X 線を使用した DRU classification が提案されました。これまでにこの DRU classification の妥当性について他の施設を含めて評価されたことはなく、今回、DRU classification と各骨成熟度評価で得られたデータと実際の身長の伸びをデータ化し、身長発育速度のピーク (peak growth spurt) と側弯進行 (peak curve progression) との関係を日本ならびにアジア圏内各施設と共同で調査する予定です。

また AIS に対する装具療法は、側弯の大きさと骨成熟度を指標に決められており、装具療法終了の判断基準としても骨成熟度評価が用いられています。そこで従来の骨成熟評価法を用いて装具治療時期を判定している施設と DRU の骨成熟評価法を用いて装具治療の終了を判定している施設で、装具治療の効果に違いがあるかどうかを合わせて検討する予定です。

本研究は、日本側弯症学会員の所属施設であれば、各施設の倫理体制に合わせた申請をいただければ参加できるシステムになっております。本研究は、アジア太平洋脊椎外科学会と共同で行われるプロジェクトであり、側弯症治療の基盤となるエビデンスを構築していきたいと考えております。会員の皆様方への本研究へのご参加、ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

日本側彎症学会 理事長 松本守雄

日本側彎症学会 国際委員会 委員長 酒井大輔